あるむぜお47

府中市郷土の森だより　al museo NO. 47　1999年3月20日

園内歳時記

恒例の「梅まつり」も終わり、いよいよ春到来です。春といえば、何よりもまず、“サクラ”を思い浮べることでしょう。郷土の森園内にもサクラが植えられていますが、市の花「ウメ」ほどの数はなく、どちらかといえばあまり目立たない現状です。その代わりといっては何ですが、春を満喫させてくれる花は随所で見ることができます。

園路脇に黄色く可愛らしい花をつけたセイヨウタンポポ、旧第一小学校の花壇に整列するカラフルなチューリップ、目立たないながらもサクラだって薄いピンクの花を満開に咲かせています。特に注目は、まるで赤いじゅうたんを敷き詰めたように鮮やかなツツジです。園内ケヤキ並木に平行して、帯のように続くツツジは、いかにも春の象徴として目に飛び込んできます。

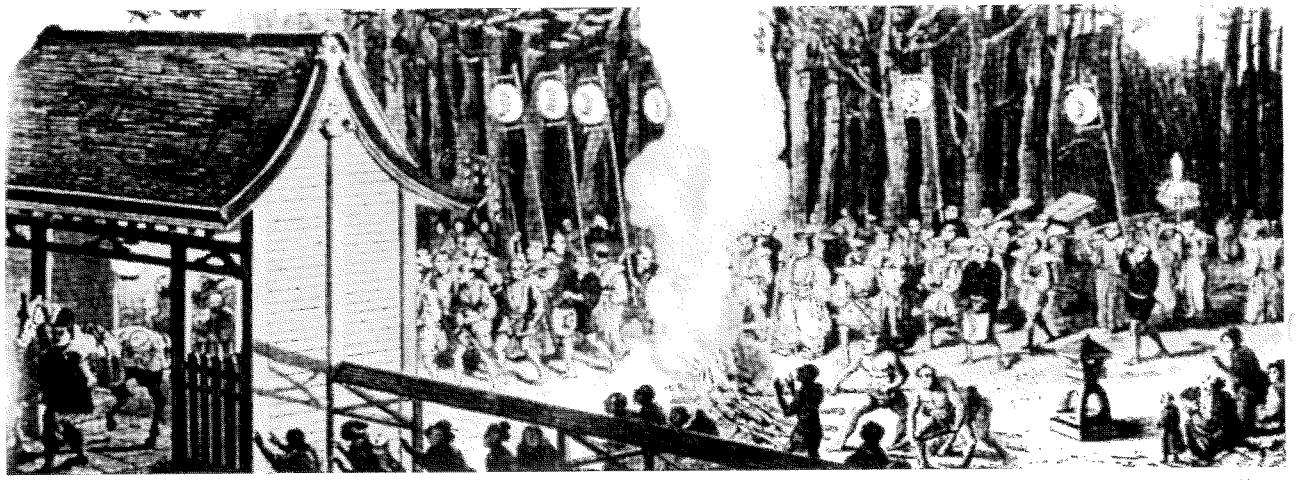
ヤマツツジ・ミツバツツジ・レンゲツツジの３種を総称して、一般に“ツツジ”と呼ばれているこの植物、日本には野生種も多く、特に霧島や雲仙のツツジは古来その名が高いことを皆さんはよく御存知でしょう。古くは朝鮮で発行された「晋山世稿」の中に「大明の成化年中に日本からツツジ数盆を得たり」と記載されているのは、ツツジの園芸的史実最古のものであり、また、古い園芸書の「花壇綱目」(1681年出版)にツツジの異名147種の花が載っているのは、古くからこれを培養した証拠でもありましょう。日本人にとっては非常に結び付きの深い園芸植物だったと考えられます。園内のツツジも園芸品種と思われますが、ツツジはツツジ。やれ野生種だ園芸品だのという前に、その彩りが季節を感じさせてくれる情景をお楽しみください。

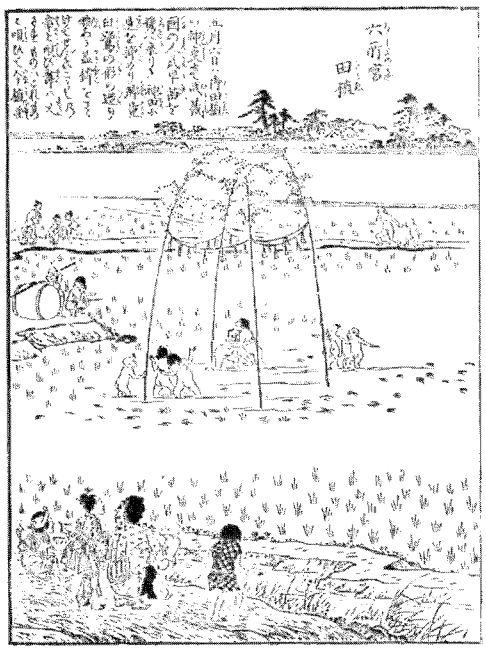
展示会紹介

ミニ展

江戸時代の暗闇祭をかいま見る

4／25日～5／9日　常設展示室にて





今年も府中の「祭」の季節がやってきました。大国魂神社（おおくにたまじんじゃ）の例大祭「暗闇祭（くらやみまつり）」です。

以前は夜中に街中の灯りを消して行なわれたのでこの名前があります。今も、そのクライマックスの5月5日には8基の神輿（みこし）が担（かつ）ぎ出されるなど、たいへん盛大な祭となっています。古くは武蔵国府の祭に起源を持つ伝統あるものですが、明治以降には、都市の祝祭的な祭として大きく発展したと言われています。

では、江戸時代の「暗闇祭」はどんな様子だったのか。描かれた「暗闇祭」を覗（のぞ）き込みながら、当時の雰囲気を味わってみたいと思います。

主な展示予定資料

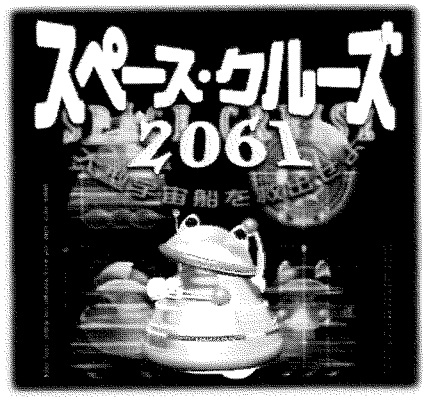
武蔵名勝図会／江戸名所図会／府中六所詣／
絵本江戸土産／LE JAPON ILLUSTLÉ

プラネタリウム春の新番組（宇宙開発事業団 企画・製作）

スペースクルーズ2061～大型宇宙船を救出せよ！～

3月20日(土)～6月13日(日)

フェニックス号から、救難信号を受け取ったインフィニティー号は現場に急行する。はたして無事宇宙船を救出することはできるか。ハラハラドキドキの宇宙旅行に、お乗り遅れのないように！



府中市郷土の森にて

みて よんで あるいて $

―激動の時代に―

小野　一之

まずは気軽に郷土の森見物。本を読んで考えるのもいい。他の博物館にも行こう。

1

前回は遊び過ぎとの指摘があったので、今回はまじめな問題を考えながらシリーズ最終回を締め括ろうと、またまた**府中市郷土の森**へやってきました。

薬屋さんの大きな看板を掲げた風格ある蔵造り。宿場町を象徴するという宣伝文句なので、てっきり江戸時代の建物かと思ったら、できたのは1888（明治21）年だそうだ。しかし、このことこそ、明治以降の都市化のなかで豊富な財力を基盤に府中の街が発展したことを示しているのです。

もう一つ、府中一の大地主だったと言われる大店も復原されています。瓦葺きの御成門、式台付きの玄関、大きな井戸のある土間、5棟もある土蔵…。時代劇のセットみたいだが、明治天皇がしばしばここに泊まったという事実が、何よりもこの家の「格」を示しています。「明治天皇府中行在所」の石標の「史蹟名勝天然記念物…」の文字が終戦直後にえぐられた痕も生々しく残されています。

2

戦争と言えば、小学校時代を懐かしくも辛くも思い出される方も多いでしょう。尋常高等小学校は1941（昭和16）年4月、全国一斉に国民学校と名前が替えられました。その年の12月にアメリカとの戦争に突入。学校も「銃後」の一つとしての役割を担わされたのです。やがて敗戦。教科書の戦争関係の語句を、先生の指示で墨で塗り潰した経験も。

3

郷土の森のケヤキ並木の脇には小学校の建物が。1935（昭和10）年に建てられた府中町立府中尋常高等小学校の校舎の一部がここに移築復原されています。玄関を入った途端に感じる独特の雰囲気。こうした木造校舎は国民学校の時代を経て、戦後も鉄筋コンクリート造りが普及する1975（昭和50）年前後まで使われていました。節穴だらけの床を覚えている方には、復原された校舎はちょっときれい過ぎてしまうでしょうが。それはともかく、展示されているたくさんの教科書やノート、作文や習字作品などと対面しながら、それぞれの思い出をたどってもらえたらいいと思います。窓からの懐かしい風にあたりながら、教室の小さな椅子に座ってちょっと時間を過ごしてみるのもいいですね。

4

例によって、文庫か新書本をということならば、「国民学校になってから歩き方にまでやかましい注文がつけられた」という時代を子供の視線で精彩に描いた**山中恒『子どもたちの太平洋戦争』**（岩波新書）、「たちこめる死の臭い」のなか、それでも「日本の教育がきらきら輝いていた」日々を回想した**佐々淳行『「六男二組」の太平洋戦争』**（小学館文庫）など。唱歌を口ずさみたくなる方は**『日本唱歌集』**（岩波文庫）。こうした時代を近現代史のなかで鋭く捉え直した決定版が**山住正己『日本教育小史』**（岩波新書）。

近くの博物館では**豊島区立郷土資料館**や**葛飾区教育資料館**、それから**埼玉県平和資料館**（東松山市）や**地球市民かながわプラザ**（横浜市）などが戦争と教育を考える上で必見です。

5

最後に訪ねるのは、少し時代は遡りますが、1921（大正10年）にできた府中町役場の洋風建築。飾り天窓が目立つ洋風の正面建物に対して、裏側には和風の付属舎が付いています。モダンでありながら畳の部屋もちゃんとある。いかにも大正時代らしい。しかし、この建物にはもうひとつの主張があるように感じられます。大正デモクラシーの時代、米騒動あり、労働運動あり。一方では、国や郡役所の強い支配に対して、地方自治要求運動も沸き起こってきました。われらが町の町役場を。ユニークな役場が造られた背景には、町民たちのそんな意気込みも見えてきます。

6

今また「地方分権」の時代。国の規制を緩和し、地方自治を拡充していこうという動きは、われらが博物館の世界も無縁ではありません。社会教育施設の管理運営や学芸員の配置などに関して国の規制は少なくなります。これに関してさまざまな意見もありますが、これからの時代、地域の博物館は多くの市民が創り支えていくんだという発想がポイントとなるはずです。

7

町役場の2階の旧議会室の窓から覗く郷土の森のメインロードは、今日もたくさんの人出ですね。その光景が少々歪んで見えるのは、大正時代か現代社会が歪んでいるのではなく、単に昔の窓ガラスだからでしょう。

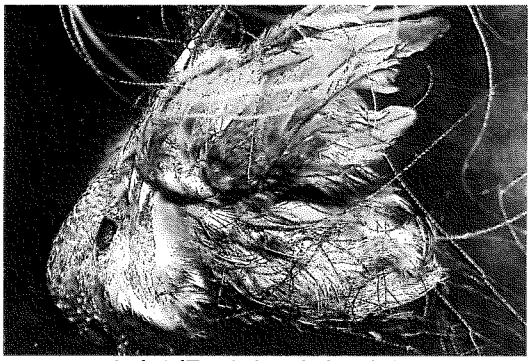
NOTE

ヒトと動物の「今」と「未来」

中村　武史

毎年恒例の「ワイルドライフ写真大賞展」。今年もまた素晴らしい作品の数々が紹介され、改めて地球上の自然の姿に驚嘆するとともに、この美しい光景を失うことのないよう、私たち人間が守りぬかなければならないことを思い知らされます。その一方で、展示作品の中には非常にメッセージ色の強いものと言いますか、明らかに自然界に赤信号を点滅させているものも発見できるのです。過去の記憶をたどれば、かすみ網にかかった野鳥を捉えた作品、密猟によって捕獲され、加工を受けている最中のワニ皮やサイの角といった衝撃の一枚です。どれにも共通して言えることは、本来自然を守る立場にある我々人間の手によってもたらされている危機を表しているということです。

明治の初め頃には、東京にもトキやタンチョウヅルが生息していたと聞きます。しかし、以後の文明・経済の発展は、我々の生活空間から多くの動物を奪っていきました。これは何も東京のような大都会に限ったことではありません。自然がかなりあると思われてきた所も同様なのです。そしてこの最大の原因は、動物の乱獲と生息環境の汚濁・破壊・消失ということになります。まさに「ワイルドライフ写真大賞展」で垣間見ることのできる、人間による野生への介入が長きに渡って行われてきたのです。



かすみ網にかかったカワセミ

▼人間の生活空間を利用する動物

本来森や林であった所が伐採・造成され、住宅地に変貌、あるいはその輪が広がって都市が成立してきました。環境が完全に変わってしまった場所に、もはや動物は皆無でしょうか。そんなことが決してないことは皆さんよく御存知のことと思います。

人間がツルやハクチョウ類へ、厳冬期の餌不足を補うために“給餌”を行っていることは全国的に有名な話です。これを中止すれば渡来数が減少するほどの影響力があるとも言われています。実はこの人間による“給餌”と同様の効果をあげる行為が各地で見られ、一部の動物を人間生活の場に増加させています。都会では、家庭や繁華街から毎日出される生ゴミに群がるカラスがその代表例でしょう。同様に、漁村における運搬・加工の途中でこぼれた海産物、農村における市場に出荷しない農作物や脱穀による落ち籾、工場・倉庫・港湾における生産流通の過程でこぼれ落ちた穀物など、数え上げたらきりがないくらい豊富な餌が、意図しないまでも都市には存在し、これらを巧みに利用して集まってくる動物がいるのです。こうした動物は、人間の生活空間を繁殖やねぐらとしても利用し、とどのつまり都会に生息するようになってしまったのです。

さて、人間側への問題も多分に生じています。特に顕著であるのは、農業・漁業における食害でしょう。イネの乳熟期にスズメが群がる、冬季のムギがカモ類の食害を受ける、ムクドリのナシ食害、ヒヨドリの野菜食害、サギ類が海上の生け簀を襲うなど、その事例は後を絶えません。またあるいは、工場やマンションをねぐらにするドバトなどの糞公害、送電鉄塔に繁殖したカラスによる短絡事故から停電、航空機の離着陸時にカモメ・トビがエンジンに吸い込まれ墜落事故にもなりかねない危険性など、たかが動物といえども決して軽視することはできない加害といえます。自然環境に手を加えた人間のツケは、そこで生息していた野生動物の人間生活への侵入という、何とも皮肉な形で還ってきていることになります。

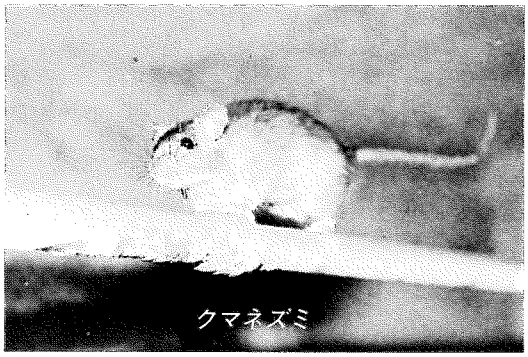
残飯をあさるハシブトカラス

▼悪者にされた動物たち

では、これら都会の動物として代表的な種類が、人間に嫌われている例をご紹介します。人間の健康や生活環境を害する理由で駆除の対象となる動物を衛生動物と称しますが、日本の都会ではネズミ・ゴキブリ・ドバトがこれにあたります。もちろんこれらの動物は不衛生で、人間の生活に直接害を与えるものもあります。しかし、単に不快感、不潔感を与えるというので嫌われている動物も含まれています。そして重要なのは、こ

れらの動物たちが決して好き好んでその立場を選んだわけではなく、多くは人間の生活圏に偶然もしくは必然的に入り込み、トラブルを引き起こす可能性をもったためにそう呼ばれるようになったということです。

○ネズミ　齧歯類は哺乳類の中で最も多くの種を持つ仲間で、とりわけドブネズミ・クマネズミ・ハツカネズミは人間との付き合いが古いようです。我々を悩ませた最大の問題は、ネズミとネズミノミによって媒介されるペストでした。ペストが一掃された後、嫌われながらも人間の生活に入り込んでいて、一昔前まで家の天井で複数のネズミの運動会が聞こえ、風呂場で石けんがかじられるという光景が見えました。今では普通の家庭内で姿を見かけることはほとんどなくなったようです。一方、都会のビル内ではクマネズミが増加の傾向を示しています。立体的行動を得意とするため縦に長いビルは最適なのでしょう。加えて、必ずといっていい程ビルには飲食店が入っていることも、残飯をあさるのに都合がいいのです。さらにはクマネズミ自身、警戒心が強く捕獲されにくいこと、殺鼠剤に抵抗性を獲得したため撲滅しにくいことなどが余計に拍車をかけているものと思われます。


クマネズミ

○ゴキブリ　イメージ的には、一番馴染みが深いように感じる人が多いかも知れません。しかしながらこのほとんどの種は、森林などで特に数が増えたりすることもなく、生態系の一員として暮らしているため、人間との付き合いが深いのは、ほんの１割程度なのです。家庭の台所などでよく見かけられるチャバネゴキブリは、世代交代が早く、繁殖力も他のゴキブリの比ではありません。爆発的に増加し、クマネズミ同様ビルの増加とともに生息地域を広めています。

○ドバト　「平和の象徴」といわれた高度成長期時代の良いイメージから一転して、先にも述べた糞公害などが問題となり、今や害鳥に成り下がっている現状です。やはりこれも乱立するビルなど、建物に生じる棚状の場所に繁殖を目的として集まってきます。

上記都会を代表する動物たちに共通することは、雑食性であること、適応力があること、繁殖力旺盛であること、そして何よりも人間の食料にならないことがあげられます。見事といってよい程我々の生活にうまく溶けこんでいるといえるでしょう。さりとて彼らに生活空間を与え、餌や営巣場所を提供し養っているのは人間なのだということを忘れてはならないと思います。むしろ養われた上で“害虫獣”呼ばわりされる彼らこそ被害者なのではないでしょうか。

▼人間と動物の共存はあるのか

動物の立場に立って、何故都市に住みつくのかを考える時、そこには餌が豊富にあったり、住みやすいなどの条件が必ずあることは、もうおわかりかと思います。逆にこの条件を一つ一つ取り除いていけば人間に依存する部分の多い動物は生きてはいけないでしょう。しかし、事はそれほど単純な方策では解決し得ない大問題なのです。本来どの動物も自然界の一員であったはずであり、真の決着は彼らを再び自然界の一員に戻してやることだと考えます。但し、これはあくまでも理想的結論であり、現実問題としてはそう簡単には成し得ないものです。実際、田畑における農薬を使った昆虫の大量駆除にしても、瞬時にして人間の生活環境を守るという方法が優先されています。また、極論すればカやノミをつぶすといった行為も最も身近な害虫駆除といえるはずです。

今後、人間の数が増えれば増える程、さらに自然への介入度合が高まっていくでしょう。そうしなければ人間の方が追い詰められていくこともまた事実であり、最低限の介入はむしろ必要でもありましょう。そんな未来が予想される今だからこそ、何とか共存の道を切り開いていかねばならないのです。いくつかの地方都市で、地域住宅・研究者・技術者の協力を得て、人と動物の共存を目的とした地道な活動が始まっています。兵庫県豊岡市では、ニホンコウノトリを人口繁殖させ再び野生に帰すという試みがあると聞いています。千葉の「我孫子市鳥の博物館」では、“鳥と人との共存”をキャッチフレーズに掲げ、かつてはガン類について本州最大の越冬地であった手賀沼の再生に願いを込め、地域の人々への自然や鳥類に関する啓蒙活動に貢献していることを知っています。また、ある意味、植物園・動物園・水族館はまさに共存の一スタイルと言えるかも知れません。つまりは、身の回りの自然環境から見直していくことが必要なのです。動物たちが生息しやすい環境づくりなど、実現可能なものから手をつけていくことこそ我々人間のこれからの課題だと思うのです。元来人間も含めて“野生”であったはずの地球上は、新たなる“野生”の確立を求めています。危機を回避できるのはその“野生”から抜け出し発展した人間自身であるといえます。博物館はその問い掛けに微力ながらお手伝いをしています。講座や観察会、そして展示を通じてまずは足元の自然を考える機会を増やしていきたいと考えています。動物や、動物が安全に暮らせる生息環境こそ我々が子孫に伝えていくべき貴重な財産であることを信じて……。

かめらと～きんぐ

天がにわかに活気づいています。

太陽が２月１６日に**金環日食**を起こし（残念ながら日本では見られず。）、まとまった**黒点**や大きな**プロミネンス**も見られるようになって、活気を呈しています。

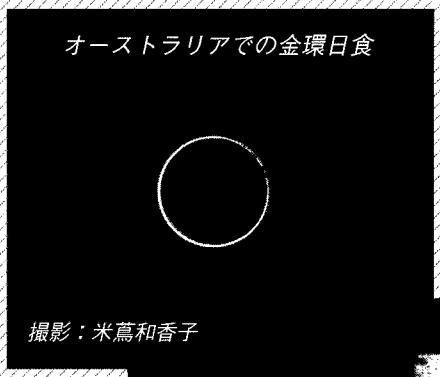
また２月２３日には夕方の西空で**木星**と**金星**がランデブーし、その日は**おうし座**の１等星**アルデバラン**が月に隠され、

１９時頃には建設が始まった**国際宇宙ステーション**が夜空を横切りました。

今年もまた１１月には**しし座流星群**が活発な活動を見せてくれるでしょうし、星空から目が離せません。

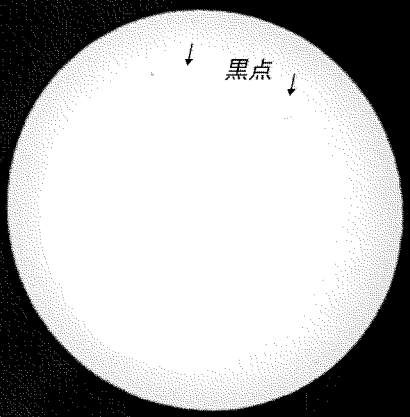
プラネタリウムでは国際宇宙ステーションや今後の宇宙開発を紹介する番組を３月１４日まで上映し、梅まつり期間中は土日ほとんど晴れていれば太陽観望会を行いました。

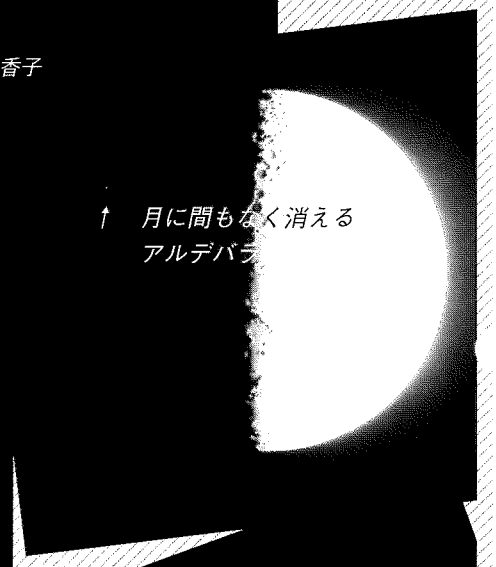
少しでも、多くの方に空を見上げていただけるよう、今後も**太陽観望会・星空観測会**やプラネタリウムで情報をどんどん提供します。



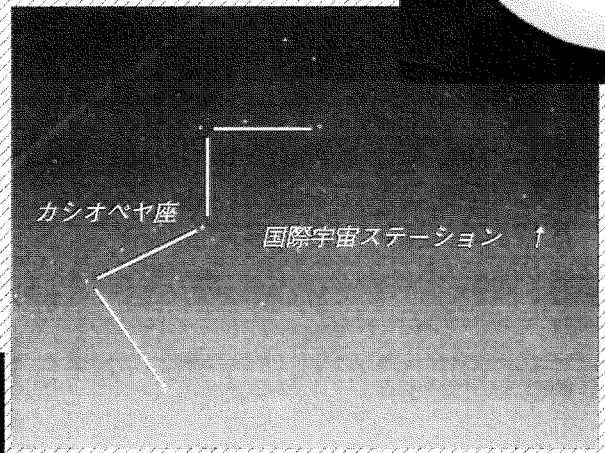
オーストラリアでの金環日食

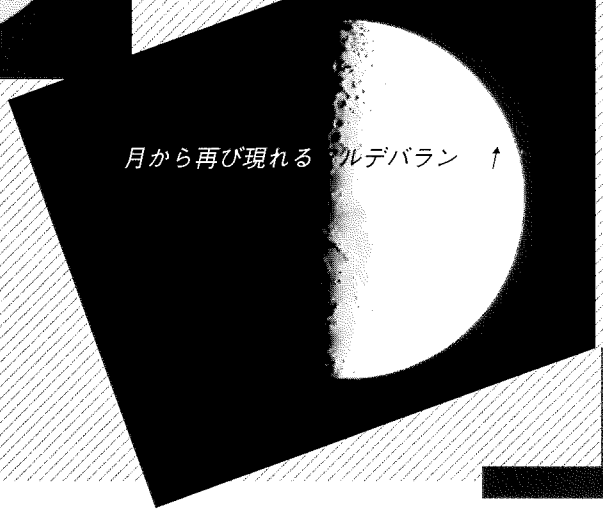
撮影：米蔦和香子





↑ 月に間もなく消える
アルデバラ





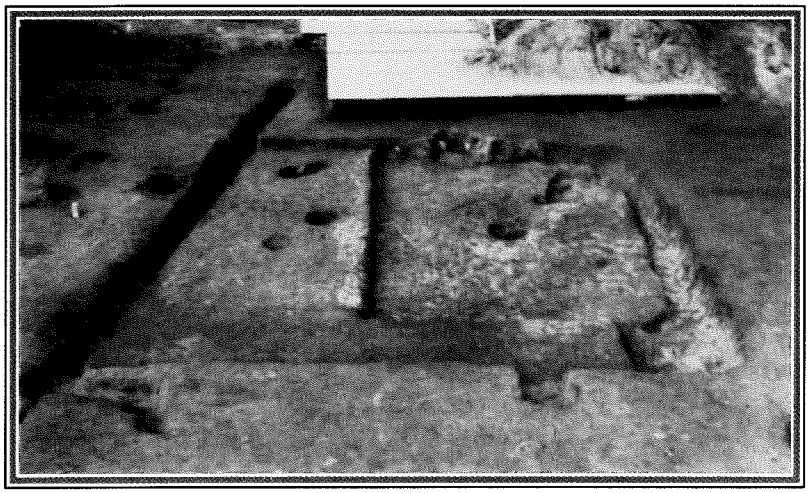
月から再び現れるアルデバラン ↑

最近の発掘調査

床に段差のある竪穴住居

宮西町（仮）ステイツ府中宮西地区から

府中市遺跡調査会　野田憲一郎



府中市内の調査では奈良・平安時代の住居跡がたくさん見つかっています。住居跡のほとんどは、ふつう竪穴住居と呼ぶもので、これまでの発掘調査で2,000軒以上も見つかっています。これらは、大きさなどに違いはあるものの、だいたいが地面を四角く掘りくぼめて、その一辺にカマドが取り付けられる構造になっています。地面を深く掘り込んでいますので、そこには土器などたくさんの遺物が残っているのがふつうで、住居内での暮らしぶりが復元できるような情報が得られることもあります。

今回は、ありふれた竪穴住居でありながら、たいへん珍しい構造を持つ事例を紹介しましょう。それは、京王線府中駅より西へ約500ｍ（宮西町3-12-1）にある発掘現場で見つかりました。この竪穴住居は、東西約6ｍ、南北約5ｍとひじょうに大きく、竪穴の深さは約60cm以上あって、北辺にはカマドが造り付けられていました。床面には東西に並んだ2本の柱の穴があって、この柱で屋根を支えていたと考えられます。

そして、珍しいことに西側の一辺に沿った幅約2ｍ30cmの部分が、床面より約20cm高く作られていたのです。段の部分は硬くふみしまっていて、崩（くず）れやすい縁の部分には補強のために粘土が貼り付けられていました。柱穴の1つはこの段上にあって、その南側には火を使っていたために土が赤く焼けた痕跡が見られました。この住居の年代は、出土した土器などから判断すると、平安時代、10世紀代の初め頃と考えられます。

さて、この段差はいったい何のために作られたのでしょう。類似した施設は、弥生時代の竪穴住居で多く見つかっています。これらはその位置や大きさから、ベッドとして使われていたのではないかといわれています。しかし、それ以降、このベッド状の施設を持つ例は減少し、奈良・平安時代に至っては、ほとんど見られなくなってしまいます。

今回見つかったものは、段上に立つ柱やそこで火を使っていたことからすると、ベッドとして使っていたと考えることはできず、別の用途を想定するべきでしょう。武蔵国衙の周辺に広がる竪穴住居には鍛冶（かじ）を行っている事例もあって、竪穴住居が鍛冶工房などの作業場を兼ねる場合のあったことがわかります。このような事例も踏まえると、竪穴住居内部の段差は、何らかの工房の作業スペースとして使われていた可能性がありそうです。

実のところ、おびただしい数の「竪穴住居」が見つかっているものの、住まいとしての確かな証拠を見出すのはたいへん難しいのです。国府で見つかる「竪穴住居」も、その多くは住居と考えて差し支えないのでしょうが、住居以外の機能を持つ場合のあることも確かなのです。今回のような遺構の発見は、「竪穴住居」の多い国府集落の実態に迫る貴重な情報いってよいでしょう。

竪穴住居は住まいか

最近、これまで「竪穴住居」と呼んでいたものを「竪穴建物」と呼ぶべきだという考えが広がってきています。実際、工房として使われたことの確実な「竪穴住居」もありますし、ほかにも住まいとして機能したとは考えにくい事例がないわけではありません。住まいであっても、倉庫であっても、工房であっても「掘立柱建物」と呼んでいることを思えば、「竪穴住居」という用語の実態の無さがはっきりします。今回見つかった特殊な事例はもちろん、「竪穴住居」がどんな使われ方をしたのか、本当のところ、注意が必要なのです。

ザ・プロフェッショナル　ワラ細工

高木　錠助

郷土の森の“ふるさと体験館”を舞台に、今日もワラ細工などに励む高木錠助さん。実演の披露や体験学習の指導だけではなく、昔の生活のこと、かつての府中の様子など、お客さんとの会話も弾みます。すっかりお馴染みの独特のキャラクターに登場願いました。

インタビュアー　Ｏｎｏ

高木（以下Ｊ）　おはよっーす。

あっ、おはようございます。今日も早いですね。寒いですから、暖かいコーヒーでも飲んでからにしましょうよ。それに、ちょっと聞きたいこともあるし…。　ところで、錠助さんとのお付き合いは、郷土の森博物館がオープンする前からです。もう１２、３年になりますね。手作りのおもちゃや、昔を思い出して描いたたくさんの絵を持って、しばしば来てくださいました。いきさつなんかを教えていただけますか。

Ｊ　前の郷土館でいろいろ古いモノを集めていた。よく見に行ったけどな。でも子供のモノがない。昔の子供の遊びの道具をもっと残しておきたいと思ったよ。新しく郷土の森ができるという話も聞いていた。ちょうど、その頃、仕事が定年になってな。余った時間を使ってワラ草履とか竹トンボとかゴム鉄砲とか作り始めたんだ。近所の山とか野道を歩きながら昔のことを思い出していたら、ある日河原に生えていたミチシバを見て、小さな草履を編んでみることを思いついた。

それが、錠助さんの人気作品“ミニワラ草履”になりましたね。

Ｊ　昔はみんな学校に行くのに、足半（踵のない半分の草履）を履いていったもんだ。その足半を思い出してこしらえているうちに、今見かける足半と結び方が違っているのに気が付いた。

本当の編み方を伝えていきたかったわけですね。今や、錠助さんは郷土の森には欠かせない“顔”の一つになっています。そこまでがんばってくださる思い入れとか、今までの思い出とか聞かせてくれますか。

Ｊ　最初は、こめっこクラブ（郷土の森の米作り体験学習）みたいのがどんどん盛んになればいいと思っていた。今はいろいろなことをたくさんしている。子供たちが一生懸命やっているのを見るのがうれしいよ。それに、体験館のいろいろな講師の先生や見にきた学校の先生、お客さんたちとも話が弾む。今までたった一人っきりでしていたことが、輪になって広がっていくようだよ。思い出と言えば、お祖父さんが作っていたワラ蓑を、思い出しながらあーだこーだと１か月かけて完成させたこと。

錠助さんの記憶力と創造力は本当にすばらしい。昔のことは何でも知っているから、気軽に聞くことができます。つい頼りにしてしまうんです。錠助さんの話や技をきちんと後世に伝えて行くことも博物館の重要な仕事の一つだと思います。籾摺りに使った唐臼を復元してみたり、一緒に自転車で“民俗調査”の散歩に出掛けたりしたこともありましたね。

Ｊ　みんなが、そう言って期待してくれるからできることなんだ。このごろは方々から来てくれとか声が掛かるけど、郷土の森だけで忙しいと断ってしまう。

それは悪い気もしますね。ところで、錠助さんにとって、子供の頃はどんな時代でしたか。それに、今の子供たちに伝えたいことは…。

Ｊ　昔は農家っていったって米ばかりを作っていたわけではない。屋号にいろいろあるように、蚕を飼ったり、漁師をしたり、鍛冶屋や桶屋やワラ細工…、みんな貧しかったから何でも必死でしたもんだ。でも子供の頃に遊んだことは本当に楽しい思い出がある。昔の時代がいいわけではないが、ありのままを伝えていきたいね。天気もいいし、そろそろ体験館へ行くよ。

あとで、また顔出しますね。ありがとうございました。

※ **あるむぜお**　イタリア語で‘博物館で’‘博物館にて’の意　　発 行 ：（財）府中文化振興財団 府中市郷土の森

府中市郷土の森だより〈あるむぜお〉第四七号　発行日　一九九九年三月二〇日　編集・発行　（財）府中文化振興財団 府中市郷土の森　〒一八三―〇〇二六　東京都府中市南町六―三二　電話　〇四二（三六八）七九二一